とあるクリエイターの始祖

模造堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とあるクリエイターの始祖

【Ｎコード】
Ｎ４８３７Ｚ

【作者名】
模造堂

【あらすじ】
ヴァンパイアならメジャー、しかし主人公は退屈で死にそうなマイナーな妖魔の始祖だった、それも忘れ去れたもう来る者も居ない妖魔の始祖。
そんな始祖が楽しみにしていたポータブルＶＲＭＭＯのＲＰＧを買い、不幸なのか幸いなのか微妙なログアウト不能に陥った。
俗に言うデスゲームです、最初からスタートチート、後に最強の五本指に入る最強の一人ですが、頭の使い道を間違いた軍事オタクだった。

剣と魔法のＲＰＧで現実に戻れるか。
注意、チートですが努力の賜物です。
仲間になる予定のものはチートから変な者まで、デスゲームを感じさせないチートぶりです

第一章夏から新年まで

第一章始まりの日

1ー1

何度も購入しては暗記して覚えたものを電子ブックに入れて、覚え切れないものを電子もメリーに入れた、そんな生活が永く続き、世間から遠ざかっていた。

自己紹介をするなら俗に言う吸血鬼ではなく、マイナーな妖魔の始祖である、その妖魔も始祖が居ることを忘れるほど長い時間が過ぎた。

今流行のポータブルのＶＲＭＭＯＲＰＧを予約して朝早く買った。

意気揚々と朝食を食べ、早速始めた。

ログインすると説明があり俗に言うチュートリアルを受け、それぞれのスキルの説明を受けた。

レベル１０までは無料交換らしく最初に創造、格闘、氣功、兵器許可、錬金術、短縮、瞑想、軽装をスキルに入れた。

合計８スロットで限界、それにより成長率が変わるらしいが、ＨＰ（ヒットポイント）ＳＰＴＰ（スペシャルポイント）しか見えず、後はスキルスロットに入っているスキルレベルが分かる程度だ。

もちろん装備も見れるが外見から幾らでも見える。

後は錬金術で宝石類を作り、それを露天商などに売りつける商いを続け、一日でそれなりの資産が残った。

ポータブルは電力を消費するが、ＨＳという頭部に装着する物で終わる。

自然発電で自給自足、外部電力も銀行口座から引かれるので問題ない。
二日目にログインして、工房を借りて創造のスキルを使い模造品を作っていた、目指すはＡＫ－４７、何度も失敗して素材がなくなると宝石類を作り、露天商で買い取ってもらい、素材を買い集めた。
それを繰り返して根本的問題を理解した。
スキルスロットとは別にスキルから必要になるスクロールバッシグ、アクティブを買ってなかった。
宝石類を作り露天商で売りさばき、スクロールスキルのバッシグ、アクティブを買い集め即使って覚えた。
それからは宝石類の質の向上、創造の施策まで行き着きひたすら繰り返し創造、錬金術、短縮、瞑想がめきめきと上がっていった。
上がるとスクロールスキルを買い、また覚える事を覚えて言った。
宝石類は１０カラットのダイヤモンドが高く売れ、馴染みになった露天商が幾人か出来た。
そんな日々が続いたが、よくよく考えると持ち込み可能な電子ブックからしっかりした設計図が出来上がり、効率的に試作を繰り返している。
８／１試作品の開発で終わり、
８／２同じく試作
８／３同じく試作、素材が心もとないので露天商を巡り買い集めた。
８／４試作品の開発
８／５試作品の開発
８／６、材料、資産的に厳しく宝石類生産を行いひたすら作り続けた

８／７、創り上げた宝石類と素材を売り買いしていくらか儲け、久しぶりに食事して工房で試作品の開発を急いだ。

８／８、試作品の開発

８／９、試作品の開発、そろそろ別のものに変えるべきか悩んだ。

８／１０、試作品の開発

８／１１、試作品の開発、手ごたえあり。

８／１２、試作品で培ったノウハウでシングルアーミーリボルバーを作ったが数分で消えた、一応成功だが、弾薬も作らないといけないことを忘れていた。

８／１３、宝石類の生産

８／１４、宝石類の生産

８／１５、宝石類の生産

８／１６、宝石類を高値で買ってもらい素材を購入し、レベルに見合ったスクロールスキルをレベルの限界まで買った。もちろん直ぐに使った。

８／１７、試作品の完成、次は弾薬の開発

８／１８、弾薬の開発

８／１９、弾薬の開発。

８／２０～３１まで弾薬の開発をして７・６２?×３９の開発に成功。

ＡＫはＳｔＧ４４の基本概念を直接継承した製品でレイアウトにも共通点があるが、閉鎖・撃発機構には米国のＭ１カービンなどからの影響［２］を受け、その基本構造も独自のものである。

ＡＫはＳｔＧ４４と同様に長ガスピストン方式を用い、銃身上にガスピストンを位置させた設計を継承し、長いバナナ型弾倉とピストルグリップを持つ共通した設計で構成されている。

ボルトを開放／後退させるボルトキャリアはガスピストンと一体化したデザインであり、ボルトと一緒に前後動する総重量の大きさから命中精度は悪影響を受けているが、泥汚れなどにも耐える確実な作動性を実現している。さらに、銃身と薬室の内部、ガスピストン、ガスシリンダー内部には耐腐食性・耐摩耗性に優れたクロムでメッキされ、腐食［３］や摩耗を抑えている。

ボルトはボルトキャリア内側のカム溝によって、その前後動とともに回転させられ、ボルト先端の突起が銃身基部の切り欠きと嵌合／解除する事で、薬室の閉鎖／解除を行う。ボルトキャリアを前進させるリコイルスプリングは後方に位置し、分解時に飛び出して紛失する事を防ぐため、ワイヤーを折り曲げたストッパーを内蔵させて一定の長さ以上に伸びないよう工夫されている。

撃発機構は大きく余裕を持ったレシーバー（機関部）内の空間に位置し、泥が侵入しても動作に支障が起き難いよう設計されている。ハンマー（撃鉄）などを動作させるスプリングは、極寒の北極圏から灼熱の砂漠地帯まで、変化に富んだソ連全域で使用できるよう、

ＭＧ４２を参考に２本のピアノ線を捻ったものが使用されている。

レシーバー右側面にはダストカバーを兼ねた大型のセフティレバー兼セレクターがあり、カバーを閉じた状態は安全位置となり、引き鉄がロックされ発射できなくなる他、ボルトも不完全な位置までしか後退できなくなる。セフティの解除には右手をグリップから離して、親指を使って押し下げる操作が必要であり、解除の次は全自動位置となり、さらに押し込むと半自動位置となるが、グリップから手を離さずに全ての操作が可能な米欧諸国のアサルトライフルに比べて、セフティ解除から発射まで時間がかかる弱点があり、ＡＫから派生したイスラエル製のガリルは、レシーバー左側面にレバーを設けてより早い操作を可能にする改良が施されている。

銃身と銃身基部の接合は、ＡＫ－４７ではネジ込み固定とされていたが、ＡＫＭでは銃身を圧入した後に一本のピンで固定する方法に改められ、中国製の５６式などでは、ほとんど全てがＡＫＭと同じ固定方法を用いている。

銃身途中にはガスポートが穿たれ、ガスシリンダーを取り外すと肉眼で目視できるため、作戦行動中にガスポートが詰まってしまっても、兵士が自力で対応する事も可能である。

リアサイト（照門）はボルトアクション式小銃と同様のタンジェントサイトと呼ばれる種類である。横方向への調整ができない為に、Ｍ１６などの上下左右に微調整できるピープサイトに比べて照準時の精度は低くなるが、素早く照準を合わせられる利点がある。

７．６２ｘ３９ｍｍ実包（正式名称Ｍ４３）は第二次世界大戦中、ＳＫＳカービン用の弾薬として
世界で最も有名なライフルの一つと言われているＡＫ－４７はこの

弾を使用する銃器として戦後すぐに開発された。１９７０年代までソビエトでは最もスタンダードな銃弾であり、現在においても世界中で軍用から猟用にいたるまで幅広く使用されている。

ミリメートルでの呼称は７．６２でいわゆる３０口径であるが．３０８ｗｉｎや３０－０６等の西側諸国の３０口径の弾頭径が０．３０８インチで有るのに対し０．３１１インチという若干大きい弾頭径を持つ。

弾頭は舟形（ｂｏａｔ－ｔａｉｌ）をしており、弾芯は鉄製でその周りに鉛がかぶせられ、さらに銅めっきが施されている。弾芯が鉄な事から、よく「アーマーピアシング弾」と誤解されるが、貫通力は鉛弾芯銅コートの７．６２×５１ｍｍ弾とほとんど変わらないため、単に高価な鉛の使用を減らすための処置である。プライマーは共産圏でよく使用されるベルダンプライマーで薬莢は鉄製である。テーパーが掛かっているため弾の装填、排莢が簡単に行える。これはテーパーのおかげで薬室内に完全装填されるまで弾と薬室とのコンタクト（接触）が少ないからである。ＡＫ－４７のマガジンが”バナナマガジン”と形容されるほど曲がっているのはこの強いテーパーのためである。弾頭の形は改良されたこともあったが、薬莢は開発されてからほとんど手を加えられていない。

ちなみに７．６２ｘ３９ｍｍの後継は５．４５ｘ３９ｍｍ弾であり、物理的なパワーは７．６２ｍｍ弾に劣るが、小口径であるがゆえ銃口初速が速く、より長射程になっている。また弾頭重量が軽いため反動が小さく、フルオートマチックでの射撃もより容易になっている。これは米軍が使用弾薬を７．６２ｘ５１ｍｍ　ＮＡＴＯ弾から５．５６ｘ４５ｍｍ　ＮＡＴＯ弾（現在はＳＳ１０９）に変えたことに呼応したためである。

1l2

1―2試作品の成功からバトル。
「え、ログアウト不能？」
「知らないなんてこちらが驚いたよ」

良く売買する露天商の工学部の男性だ。

「いつから」
「8／2から」
「マジですか」
「むしろ知らないで過ごした君に驚いたよ、それでこれからどうする、ＰＫは出来ないが、フィールドが開放されたぞ」
「試射に入ってくるよ、どのみち誰かが開放してくれると思って」
「錬金術師は戦闘系じゃないからな」
「格闘もありますので安心でしょう」
「今の所デスペナルティーはないから、気をつけてな」

街の外に出るとき、まともな防具を着けていないために引き止められたことがシバシバ。
外に出ると、アクティブではない、ただ動き回るプリンというモンスターを見つけ、試しにＡＫ―４７で短連射の反動でずれながらもヒットして霧散した。
次からはセミオートで単発ずつ撃ち、夜頃になると単発なら7割の確率で当たるようになっている。

町に戻り、知り合いの素材屋で買い取ってもらい、翌日から朝食にシャワーを浴びて着替えがないので同じ服を着て衣料品を買い込んだ。

ＡＫ―４７に改良を加えたいがよく分からない、改造を考えたことがないからだ。

そこでカスタム屋を探し知人の紹介で技術屋を紹介され、そこで設計図から完成品を再現し、何回か試射した、技術屋は直ぐに問題点、火力の増強から口径を大型し、弾薬は７・６２?×４５口径になった、技術屋から教えを受け整備の仕方、まともな射撃技術を学んだ。

ＡＫ―４７・改、他にも素材を変えて軽量化、低反動に押さえ込んだ。

「何故こんなに親切に」
「非常に簡単だ、私も最初は創造を使ったが挫折して技術屋をしているわけだ、それと射撃は覚えているか?」
「あ、忘れていた」
「覚えておくといい、役に立つ」
「じゃありがとさん」
「支払いは済ませてね」

支払い、スキルチェンジのＮＰＣのところで瞑想と射撃を変えた。
思うが無機質なアンドロイドのような音声は変えたほうがいい。
工房に篭って色々と試作してみた、リボリング式グレネードランチ

ャーとか。
三日後、また技術屋の元に向かった。

「いらっしゃい」
「少し手ほどきを受けようかと」
「有料だよ」
「もち」

図面を何枚も見せ、改良点を付けてもらった、その他に軽いカスタム技術。
支払いを済ませ、開放されたフィールドというアテネの裏庭に入った。
アサルトライフルで戦い、他の人々から驚かれた。

ゴブリンを率いるゴブリンキングの一団に遭遇し、アームスコー４０？ＭＧＬを乱射して壊滅させた、残ったゴブリンは逃げ出し、ゴブリンキングは倒された。

次からはＳＰＡＳ１２イタリアのルイジ・フランキ社が開発したポンプ及びセミオートの二重動作方式を持つショットガン、それをフルオート式に改造してある。
ショットガンの連射でモンスターは直ぐに一掃され、ゴブリンキング率いるゴブリンなどはアームスコーで対応した。
爆音と爆炎が裏庭に響き燃やし尽きる。
気づけばＳＰとＴＰがそこを尽いており、即逃げ出した。

町に戻ると馴染みの錬金術師の元に向かい素材を売り払いＴＰ、ＳＰを回復させる薬草を買い込んだ。

夕暮れで空は茜色、晩飯を食べて衣類などを買い求め、スクロールスキルを買い込み、それなりに上がったほうだ。

工房でシャワーを浴びて着替え、寝付いた。

翌朝、基本的に一日一食だが、それでも朝食を食べ、保存食など道具入れに入れて、朝早く狩りに向かった。

朝早いために誰も居らず、オリン・ＣＯＷ・コンバット・ショットガン、板型のフィルムを持つブルバック型の散弾銃、これもフルオート可能だ。

オリンで雑魚を狩、ゴブリンの群れなどはアームスコーで粉砕した。はっきりといえば剣と魔法の和洋折衷の時代に反則的な銃などを使うために他のパーティとは相容れない、ワンマンで可能だから。

今の所は。

広いフィールドでアームスコー、ペネリＭ４のフルオート仕様で狩

りに刈った。
一番湧きやすい場所でひたすらフルオートペネリで駆逐し続け、ＳＰ、ＴＰが尽きそうになると回復薬で回復させ、また駆逐する事を繰り返し、午後になって回復薬が尽きたので町に戻った。

町に着くと馴染みの露天商を回り売買しながら情報を集めた。

それから格闘と氣功の二種類を鍛えるために、訓練教官の下でひたすら人型モンスターと奮闘していた。

本当は最初にやるようだ。

それが二週間続き一人前になるとマスターするまでレベル上げに奮闘した。

二ヶ月目が終わり、十二の灯火に二つ目が付いたらしい、新しいフィールドの開放だ。
マスターして格闘、氣功から仙技、仙術に昇格した。

またレベル１に戻り、また訓練教官の下でひたすらマスターの為にレベル上げをしていた。
上がりにくく二週間で止めた、残金も心もとないので二番目のアテナの裏庭でひたすら刈っていた、単独なら仙技で戦い今ではプレイヤーも居ないフィールドで一人奮闘していた。

大量にドロップしたアイテムを町で売りさばき、回復薬を買い集めた。
レシピスキルも久しぶりに買い破産寸前に陥った。

いつものフィールドで節約の為に仙技で戦い、その威力は桁違いだ。
兵器頸柔頸、硬頸、雷掌、寸頸、閃刀、硬気功、軽気功、集気法、生命波動、御神力の技及び術を習得し、その威力は下手な火器を上回る。
少ない消費で戦い、劇的な効果を生み、特に雷掌は抜群の効果を生む。
そんな戦いを夜遅くまで繰り返し、回復薬を殆ど使わず集気法で回復したからだ。

気づけば回りをゴブリンの群れに囲まれている。
アームスコーで乱射して、片手でオリンを使い激戦が始まった。
アームスコーでグレネードが発射され、曲線を描き何十発もゴブリンの群れに着弾し、ゴブリン達が霧散する。

突進してきたゴブリンはオリンの散弾を食らい倒れていき霧散する。

コブゴブリンが突進してきた、アームスコーを向け発射する、４０？グレネードを食らい一撃で霧散した。

コブリン達が消え去ると、ゴブゴブリンが突進を繰り返しアームスコーの餌食になる。

次はゴブリンシャーマンの出番とキングの出番、そこに４０?グレネードを撃ち続け、囲んでいたゴブリンの群れは全滅した。

兵器を消し、集気法で回復した、その後に回復薬を使ってＴＰを回復した。

さらに気配からゴブリンの群れが幾つか、めったに出ないゴールドアントの群れが一つ。

夜遅く月明かりが頼りで、慣れている事もありボウガンの４０?グレネードを取り付けた、低音の奇襲から群れは混乱し、キングが指示して陣形を立て直している。

その騒音でボウガンの弦の音がまぎれた。

無音の連続でゴブリンの群れ、ゴールドアントの群れは壊滅して行く。

数が減ると混乱から立ち直り、それぞれの群れはこちらに向かって来る。

最後の曲射を終わらせ、仙技での戦いになるために集気法を使いＨ

Ｐ、ＳＰを回復し回復薬でＴＰを回復させた。
残ったのはゴブリンの群れ達を纏めるキングが五体、ゴブリンシャーマンが十体、ゴールドアントが二体。
接近するキングを雷掌で爆散させ、シャーマンを閃刀で切り裂き、生命波動でゴールドアントを倒して集気法で息を整え消費したＨＰ、ＳＰを回復させ、帰路に着いた。

あれから二日、露天商等は店を新しい町に移すらしく、依頼が殺到したそれを行い、それを全部終わらせるのに二週間、報酬を受け取りバンピーの町はすっかり人気がなくなっていた、工房の道具を道具入れに入れて新しい町に向かった。
三番目のフィールドにある苦行の塔からクギョウが定着した。
馴染みも増え工房を借りて道具を設置して、砂漠のオアシスにある、町ながら活気が有り四方にフィールドがある、それぞれ砂漠、樹海、草原の三種類、残る一つはビギナーの町との通路。

十二の灯火から三つが燈っている、基本的に気にせず、技術屋のところに行きアームスコーのボウガンでの戦い方から、かなり感心され、発想の転換だと褒められた。
色々と教えてもらい。

1ｌ3

1―3登場人物の紹介。

主人公、マイナーな種族の妖魔の始祖、一日一食でも良いが一ヶ月程度なら無補給でも生きられる、人間に化けられ、見た目は人間の二十代前半の日系。

装備電子手帳。

顔は中の上、身長１８２センチ、体重１００キロの巨漢。

スロットで最初は創造ランク１、格闘ランク１、氣功ランク１、兵器許可ランク１、錬金術ランク１、短縮ランク１、瞑想ランク１、軽装ランク１から、創造ランク４０、仙技ランク１０、仙術ランク１０、射撃ランク３５、兵器許可ランク４０、錬金術ランク４０、短縮ランク４０、軽装ランク４０にチェンジと昇格した。

創造、兵器許可、錬金術、短縮と連動してレベルアップしていく錬金術で人工宝石類を生み出し、重火器までこなす頭の使い道を間違えた始祖、基本的に無学ながら自己流で学んできた。

仙技、仙術の昇格で得た兵器頸柔頸、硬頸、雷掌、寸頸、閃刀までは仙技、硬気功、軽気功、集気法、生命波動、御神力は仙術、基本的に死角なし。

性格は紳士的ながら本来は傲岸不遜、始祖にありがちな性格。

兵器紹介

ＡＫ―４７、ソ連が作り出した今でも使われる小火器。

ＳＰＡＳ１２、軍用ショットガン、イタリアのルイジ・フランキ社が開発した二重動作方式のショットガン

オリン・ＣＯＷ・コンバット・ショットガン、ブルバック式（マガジンをグリップより後ろにつける）

ペネリＭ４　１９９８年５月４日に１２ゲージの弾薬を使用する軍用セミオートマティック散弾銃をアメリカ軍が求め、これにベネリ

が応じて5挺の試作品を8月4日に提供した。競合する他の散弾銃を抑え、１９９９年にＭ１０１４として採用、初期の2万挺がアメリカ海兵隊に同年供給された。

作動方法

Ｍ３までの反動利用式（イナーシャシステム）からガス圧利用式（Ａ．Ｒ．Ｇ．Ｏ．（Ａｕｔｏ Ｒｅｇｕｌａｔｉｎｇ Ｇａｓ Ｏｐｅｒａｔｅｄ：ガス圧自動調節）システム）へと作動方式が大きく変化している。これは軍用として使用する時、装薬が一定なのでガス圧式でも動作不良が起こらない。そのため複雑なイナーシャシステムが必要無いのと同時に、イナーシャシステムでは反動をきっちり受け止めないと作動しないという弱点（オートマチックのハンドガンを緩く握ると装填不良が起こるのと同じメカニズム）があることが原因と言われている。また、部品点数を減らし信頼性を上げると言うことからポンプアクション機能も省かれている。

レシピスキル一覧。

創造＋兵器許可＋錬金術＋短縮＝歩兵の軍事兵器の一時的な物質化、短縮のランクアップにより待ち時間は僅か一秒、錬金術のレシピスキルでそこそこの錬金術が使えるが、本来の創造による軍事兵器の物質化を寄り円滑に進めるための補助的なものに強化している。

仙技＝兵器頸→柔頸、硬頸、雷掌、寸頸、閃刀

仙術＝硬気功、軽気功、集気法、生命波動、御神力

射撃＝早撃ち、片手撃ち、曲射、地上掃射、十字砲火、跳弾、精密射撃、集中連射。

軽装＝サバイバル、オートドロップ確保、咒術抵抗・中、物理抵抗・中、属性抵抗・中

以上

技術屋、名前はまだ出ません、次からです

どんな兵器もカスタムして、主人公のような創造スキル所持者の師匠でもあり、一番の技術屋、本業も同じく。

露天商の素材売買屋、飲食販売屋、錬金術士の回復薬販売者、宝石類買取屋、
以上。

1ー4

1―4

三ヶ月目の中ごろ、賃貸工房でひたすら新兵器の試作を行い、時々宝石類を高純度で作り販売しては技術屋の下で教えを受けている。

「君は優秀ながら発想が素晴らしい、即に言うローテクもハイテクもこなすからどちらも使える、優秀な教え子といえるね」

評価はそんなもので、実際素材屋の亭主から買ったもので何度も試作を繰り返して、技術屋が気づかなかった盲点を付いたことも有る。

最近は熱線機構を考慮中、試作を繰り返すが、なかなかうまく行かない。

レーザーライフルはすでに実用化されているが、実戦配備には軍も消極的で火薬式を今直採用している。

熱線砲ともいえる、重火器から小火器まであるが、なかなかうまく行かないのが実情。

蛍などの発光細胞と眼球の水晶体を利用した生体レーザーを考案、実際に使ってみると仙術のカテゴリーに入るらしい、新開発の技術となった。

磁場や水に弱いのが弱点だが。

それを技術屋のクロードに伝えると苦笑して、よく出来ましたと褒められた。

四つ目の灯火が燈ると干支だと理解した。

０　１　２　３　４　５　６　７　８　９　１０　１１
十二支　鼠　牛　虎　兎　竜　蛇　馬　羊　猿　鶏　犬　猪

こんな感じになる、よく見るとＰＫが解禁され、色々と混乱していた。

基本的に殺人に近いためにＰＫを行なった者には、高額な賞金がかけられることが決定。
つまり今は兎、ウサギさんが意味することまでは知らない、理由はまともな教育を受けておらず、どちらかといえば理系だから。

三方面の整備された街道から呪術都市、科学都市、古都ジクロード

が発見された。

そろそろバトルもしたくなり、砂漠に向かった、スコーピオン、ストーンゴーレム、何所にもいそうな砂漠系のモンスター、問題は群れないこと、音から集まってくる厄介な習性。
小火器ですら危険すぎるので素手で戦おうにも、人型ではないスコーピオン等は厄介だ。
それなので音のしない生体レーザーで焼き切った。
無音で戦う創造の使い手として有名になっているのは後の祭り。

砂漠での戦いは直ぐに飽き、樹海に向かった、飛び回る巨大な蜂、ウッドゴーレム、巨大な蝶、熊等自然な生き物が多数含まれている。

砂漠の様な習性は無いもの、その分耐久力がずば抜けている。

主にロケットランチャーを使い一撃必殺で一体を倒し、接近すれば雷掌で倒し、距離が微妙なら生体レーザーで倒した、森の奥へと進むにつれモンスターの数も質も上がっていった、砂漠にはなかったもの。

アームスコーからリボルビング式ロケットランチャーを考案し、それで六回撃ち続け、大抵のモンスターは一掃出来る、その爆風と衝撃波によって削られるからだ。

ＩＭＩ社が作ったＳＭＡＷは重量７・６９キロ、前兆７６０?、口径８３?、初速度２２０キロ、アイアンサイド、光学照準、暗視装置、肩撃ち式の多目的ロケット投擲発射機である、軽量故にリボルビング式に向いていた。
弾種、両用弾、対戦車弾、サーモバリック爆薬弾の三種類

モンスターを発見すればロケットで砲撃して撃ち倒した。
こんなところで軍事技術の知識が役立つとは思わなかった。

ＨＰ、ＳＰは集気法で回復できるのでＴＰの回復薬に道具入れは満載できる。

どんなモンスターも一撃必殺、戦車の装甲からすれば容易いものだ。

奥に進むと迷った、奥に進むにつれモンスターの密度が上がり、最後の砦のような場所でロケットを撃ち続けた、慌てて出てきた今まで居なかったリザートマンが現れ、砲撃の中紅蓮に包まれるか爆風で倒れていった、その掃討が終わるとロケットで壁を破壊して内部に侵入、久しぶりにＡＫ―４７・改を使い接近するリザートマンを撃ち、霧散していく。
内部に侵入して三十分、リザートマンは居なくなりさらに入り口の扉を爆破して内部に侵入した、パワーリザートマンが密集して突撃してきたためにロケットランチャーに切り替え、何十発も撃ち込み、紅蓮の焔が突撃部隊を殲滅した。

さらに奥に進むとリザートキング、リザートアーチャー、リザートシャーマンが合計十体、ロケットランチャーで雑魚を一掃すると、キングに雷掌を撃ち込み、生体レーザーで首を切り落とそうとすると片腕を犠牲に超低空回避、その中で生命波動でダメージを与えると生体レーザーでトドメをさした。

お宝を貰い値が張るがリターンの道具で帰還した。

四方の町に帰還して、馴染みの露天商の素材屋に寄った。

「ようロルカ、元気にやっているか」
「ドーナツの穴が食えるほどな」
「とんこつラーメンの間違えだろ」
ロルカが豪快に笑い、素材の売買をして教えられた。
「樹海のリザートマン砦を攻略したなんていわないほうが言い、下手したらＰＫされるぞ」
「どうもご親切に、別に武勇伝を語る仲間も居ないからな」
「それはそれで侘しいな」
「ソロでも十分だよ」

買い込んだ素材を持って賃貸工房でシャワーを浴び、満月の夜に一人晩飯とワインを飲んでいた、本当は焼酎が良かった。
翌朝、錬金術で回復薬系を作り、宝石類を作り、素材から刀剣類を作って昼飯を食べて露天商を行なった、珍しいらしく冷やかしがよく来た。
一日で在庫が残り、二日目で完売した。

露天商の馴染みから良くやったと賞賛を受けたが、交渉が下手とも言われた。
それから錬金術のレシピスキルから色々と取り揃え、毎日のように販売していた。
その資金で技術屋のクロードに創造補助アイテムを相談した。

「それなら科学都市に行くといいよ、紹介状を書くね」
「ありがとう」
「いいって、少し待ってね」

数分待つと紹介状が渡された、礼を述べ、科学都市に向けて樹海の整備された街道を歩き、時折遭遇するモンスターをＳＭＳＷで討ち霧散させて、小銭を稼いだ。
科学都市に到着すると相応の活気があり理系の人々が電子機器を作っていた。

紹介状の住所の建物に入り、店の亭主に見せた。
人間にはあまり興味がないが美形で妖艶な三十代の女性だ。

「あらあらクロードから、相変わらずね」
「それで作れますか」
「作れるわよ、ただ１０万はするわ」
「なら出来たらトレードで」
「了解、ツケも利きくわよ」

数時間待ち、作られた腕にでも着けるような機械が持ってこられた。

「じゃ１０万」
「あいよ」

トレードに十万で交換し、使い方を聞いて説明書を渡され、科学都市で一泊した。
どうも科学的に創造の補助機械らしい、具体的には創造の記憶化、短縮化、カスタム可能、メモリーをつけることで付加価値を追加できるらしい。
そこでもう一度向かい相談に乗ってもらい、どの様なメモリーが良いか吟味した。
兵器許可が下りているので、乗り物まで網羅する合計５０万のメモリーを追加する。

帰路はハーレーで、片手にロケットランチャーを持って、帰路に着く。

帰れば俺が高額賞金首になっており、まさに？
馴染みに聞くと噂で人が消えたらしいと言っていた、それんが俺と何の接点がというとその日にこの町にいなかったからしい。

賞金首の事務所に向かい身の潔白を証明した、担当者は紳士的な態度に直感的にＰＫを好む性質ではないと判断し、賞金は取りさげられ、変わりに調査中の依頼になった。

久しぶりに焼酎を買い保存食を購入して、賃貸工房に入った。

保存食で晩飯を食べ、楽しみにしていた焼酎を飲んで一本では足りず、二本を空け、そのまま寝付いた。

翌朝アルコールの匂いを漂わせ、風呂に入り湯船に浸かった。
日本人ではないが、風呂に入る習慣は長い歴史を誇る。
それはそうとして風呂から出て脱衣所で着替え、胴着と袴だ。
時代を間違えたような格好で歩くのだから、目立つ、無音だと後ろ指を差される。

1l5

1—5

砂漠を生体レーザーで突破して古都ジクロードに入った。

スラム街の様な雑多とした人ごみ、本来なら立派な露天商も粗末に見える。

知人を見つけ、前に移住を手伝った工房持ちの露天商、工房は借りるか、買うかに分かれ、もちろん購入したほうが高い、借りたほうは毎週資金から天引きされる。

「おお、無音じゃねぇか」

「そのあだ名は定着したのね」

「そんな湿気た面しらいで、品物でも見ていってくれ」

見ると簡単な機構のリボルバーなどが売られていた、よくよく吟味してマグナム系が出来上がっていることに驚いた。

「お前さんに影響を受けて銃か作られるようになってな、今ではコルトパイソンの売れ行きがいいぜ」

「残念だが自分で作れるので意味はないな」

「残念だぜ」

「重火器が作られたら言ってくれ」

「またな」

「じゃ」

街中を散策し、古都ジグロードは混沌した呪術にも科学にも混在したような町だった。
レシピスキルを購入し仙技は無く、生体の技術が乗っていた。
それを覚え、称号がつき創造士の称号がついたおかげで創造の効果が強まり、消費が低減される。
おかげで創造士が分かり、無音だと知られてしまった。

古都から呪術都市までハーレーで移動して草原は走り易く、生体レーザーの使い道は多岐に渡る。

呪術都市は最先端の呪術を取り扱っており、防具屋で初めて防具類を揃えた、狩衣、白胴衣、白袴、草履を揃えた、それに付属効果を取り付け２０万ほど支払った。
統一効果があるらしく装備欄に短縮効果２５％アップとあった。
属性抵抗値が＋２になったのは呪具を取り付けたからだ。

十字路の町に戻る際、生体レーザーが活躍し、他にも覚えたものを連発していた。
町に戻ると調査が終了しＰＫした者が縛り首になっていた。
街中では死にはしないが、さらし者という意味合いが強い。

今の所、剣と呪術それに台頭してきた銃器類。
どちらも現代だかファンタジーにかなり近い。

十字路の町で工房を買い取り、財布がかなり軽くなった。
ひたすら高純度の宝石類を作り、それを宝石商に買い取ってもらい、ランクが上がったと言われた、今では二級のダイヤモンドに代表される宝石類が高値で売れる。

「常々思うが、需要はあるのか」
「有るぞ、職人の手にかかれば人件費を引いても二倍で売れる」
「儲かるな」
「ああ」
「また来る」
「今後ともよろしく」
「あいよ」

工房に戻り、久しぶりに食事を取り、焼酎で泥酔するまで飲んで寝る。
翌朝、古都の知人から連絡が来て銃火器製造に携わらないかと言われ、考えた末に手伝うことにした。
バギーで移動して古都に着くと知人のチグレから案内され、銃器類開発現場に到着し、早速拳銃から散弾銃等単純な機構のものから手がけ、それからボトルアクションライフル、銃剣、セミオートの拳銃まで手がけ、半自動拳銃まで作られ、混沌の都と言われる古都ジグロードは銃器産業が発展し、それに伴ういくつかの兵器メーカーが生まれ、それぞれ競うように自動小銃、機関銃の開発に取り掛かった。

乗り物にも手がけ、バイクメーカー、バギーなどが作られ始めた。
全ての武器にはランクが影響しているらしく、低いものは拳銃など

から始めるしかない。

防具の開発にも取り掛かり、ナノカーボン繊維を作りそれを衣類に使えるようにしてそれがメガヒットした。

開発者にはライセンスがあり、それを貸し出すことで資金を得たが、俺はライセンスを放棄して、開発人から散々説得されたが曲げなかった。

ライセンスを放棄した変わりに銃器類の情報を貰うことになった。

銃器類の情報がいち早く手に入り、その技術から素材まで丸分かり、それで久しぶりに技術屋のクロードの元に向かい、相変わらず客は居らず、暇そうに煙草を吹かしていた。

「やあ久しぶりだね、ライセンスを放棄したって」

「死の商人になる気はありませんから」

「そうか、なら何の相談だい」

「エネルギー系の武器を作ってみたくて」

「レーザーライフルなら不要じゃないか」

「レーザーキャノンです」

「それなら時間がかかるね」

図面と睨めっこしながら何度も改良を加え、レーザーライフルの機構から応用して戦車砲に匹敵するＳＭＡＳ並みの大きさにまとまったが射程距離が百メートルでレーザーが拡散してしまう、そこで改

良を加え何度も試作し、そして完成した後にレーザーガトリング砲を提案した、珍しく意気揚々と図面に取り掛かり、何度も改良点を模索しながらレーザー系の武器が創造する種類が増えた。

レーザー系の重火器は重さがネックで両手を使うのが弱点で、キャノンは肩撃ち、ガトリング砲は両手で支え発射までのタイムラグがある。
そんな弱点を持ちながらも十二分に無音の為に効果的だ。
それらネックを改良する日々が続いく。
四ヶ月目の終盤になるとネックは解消され、威力をそのままに小型化、軽量化、タイムラグの克服、連射の効率化、様々なことが克服され現在の技術水準を飛び越えた。
そして弱点に気づいた曲射不能、間違えれば誤射の可能性、直線状にしか意味を成さない事。
思い返せば戦闘系のプレイヤーより生産系の方面で活躍しているようだ。
最初はやはり引き篭もり、九月から戦闘系、十月にやはり戦闘系、十一月は生産系、俺としては戦闘系でありたいのでこれから活躍する。

攻略スレを読んだが最強と呼ばれるのは五人、無音こと俺、大破壊の星空、数の蒼天、深紅の紅蓮、一刀の碧眼、この内星空、蒼天と接触することにした。

「こちらでよろしいですか無音さん」
「よろしいでしょうか無音様」
「入ってくれ」

二人が中に入ると驚いた、整理整頓が出来ている上に客人用テーブルと椅子がある。

「どうぞ、ワインでよろしいか」
「ああ」
「ええ」

二人が座り、グラスにワインが注がれる、それを二人は一口のみ

「高級品ね」
「美味いな」
「そういってもらえれば酒造屋も喜ぶだろう」
「それで私に何の用」
「僕に何の用だ」
「話してみたくてな」
「そうね、別にかまわないわよ」
「右に同じく」

それから今までのことを話、互いに話し始め、酔いもあり饒舌に喋っていた。
そのまま意気投合し多岐に渡る会話とワインを楽しんだ。

「寝るわ」

「ベッドを使え」
「僕も眠いよ」
「安心しろ寝袋がある」

足りがそれぞれ眠ると俺も寝袋で寝付いた。

翌朝風呂はシャワーだけにして、装備類を身につけ食事の準備をした。
二人が起き、今まで猫を被っていた星空が地で食べ初めて蒼天が驚いている。

「別に地で良いぞ」
「ありがとよ」
「僕はなんていえばいいんだ」
「食事が冷める食べたほうが良いぞ」
「君は驚かないんだね」
「女性にしろ、男性にしろ、地はある」
「飯がうめぇ」
「本当に昨日と同じ人」
「てめぇなけちばかりつけるんじゃねぇぞ」
「怖いよ、お腹もすいてきたし食べるか」

三人で食べ、二人とも料理人に向いていると話した。
それからワインとツマミを食べながらあれこれ談話していった。

「よしパーティーを組もう」

「別にかまわないがそれぞれ単独で最強だぞ」
「最強パーティーさ」
「じゃスロットのランクを見せ合おう」
冬樹、創造５０、仙技１５、仙術２０、射撃４８、兵器許可５０、錬金術５０、短縮５０、軽装５０、
青空、愚者４８、拳士５２、召喚５８、仙術２８、短縮５８、瞑想５８、思念５８、軽装５０
星空、歌手３１、演奏３２、剣士４１、咒術５２、短縮５２、瞑想５２、思念５２、魔装５２

「誰もが高レベルだね、それも前衛、後衛どちらも可」
「リーダーは冬樹だ」
「面倒なんだね」
「ああ！？」
「なんでもないです」
「ヘタレ」
「そう苛めるな、誰にでも得手不手はあるものだ」
「ハハハ、なかなか人が出来ているじゃないか」
それからレシピスキルの会話をした。

１－６

登場人物紹介１－６
冬樹、創造５０、仙技１５、仙術２０、射撃４８、兵器許可５０、錬金術５０、短縮５０、軽装５０
兵器種類にレーザー系が追加され仙術類の多様性を獲得した。

称号・召喚士、青空、愚者４８、拳士５２、召喚５８、仙術２８、短縮５８、瞑想５８、思念５８、軽装５０

英霊＝物理無効、咒術無効、自然効果、属性攻撃無効、ユピテルの怒り、大旋風、ガイアロック、エクスプレーション。

召喚、ランク限界まで五体を召喚

拳士＝輪剄、徹陣、地層返し、鋼鉄斬

仙術＝硬気功、軽気功、集気法、生命波動、御神力

性格は常時は能天気でヘタレ、柄の悪い相手にはさらにヘタレ。

称号・咒術剣士、星空、歌手３１、演奏３２、剣士４１、咒術５２、短縮５２、瞑想５２、思念５２、魔装５２

歌手＋楽器＝歌声と演奏で補助的なものから回復までこなす

剣士＝アサルトステップすばやく踏み込んで低姿勢からやや上に突き上げる二連技、
サンセットラスター上下から剣を振り下ろす技、

ソウルピアシング踏み込んだ後低体勢からの突き、
ダブルウィンド敵に近寄った後左右から切り払う二連撃、
トライクルセイド剣を構えながらジャンプして敵を跳ね上がる三連撃、
ホーリースマイト剣に聖なる力をこめて横から切りつける技、
ミステックファントム一瞬で相手の背後に回り斬撃を銜える、
レゾネイトペインすばやく踏み込み突きを繰り出す四連撃。

呪術＋短縮＋瞑想、テクノマジック、生体系、光学系、化学系を得意とする

ちなみに3馬鹿トリオのようになるのかと思います。

1ー7

1―7

三人でパーティーを組んで、連係プレイを行なうがうまく行かず、誰もがソロプレイが当たり前で、チームプレイは苦手なのだ。

そこで歌手に専念してもらう中衛の星空、後衛の蒼天、前衛の俺とは言うもの、△の構成でケースバイケース、歌手と演奏に専念してもらう場合も有れば、剣士の腕前を見せるときもある。

蒼天は英霊と拳士と仙術を行使するために、前衛でも活躍でき、数が必要になれば召喚を行なう。

俺の場合は軍事兵器で削り、仙技で決める、仙術も多用して今は誰もが前衛・後衛を交互に行いチームプレイをコツコツと培っていった。

そんな時も過ぎ、十字路の町を拠点に装備を整え、科学都市、咒術都市、古都を巡り装備類の調達兼チームプレイのスキルを磨いていった。

儲けは減ったが、その分個人の負担が激減した。

十字路の町では見せしめの賞金首が増える傾向に有るのが問題。そして縛り首でさらされている。

Ｓ＆ＷのＭ５００の４インチモデルのコンペンセイターモデルでもある。
もちろん５０口径の１２・７ｍｍの化物拳銃で回転弾倉の五発仕様。

弾薬は設計図で覚え、蒼天は科学都市で英霊、召喚の補助的な機器を買い、星空は呪術都市で演算機関呪具剣を買い、さらに値の張るアコギギターを買った。

当然防具も買ったわけで、あと少しで破産寸前になっていて、急ぎ砂漠の狩で何とか持ち返し、素材屋ロルカのところでいらない素材を売り払い、宝石類になる素材を買い集めた。
二人には自由にしてもらい、二日ほど工房に篭り、一級の宝石類を作り、宝石買取屋に原石を持ち込み初めて交渉して高値で買い取ってもらった。
二人と合流すると酒場に入り、高値の酒を注文し続けた、刺身はないので、燻製の塩漬けの肉がツマミだ、話の種も戦闘に関連するチームプレイ。
深夜まで飲み明かし、工房に戻り順々で風呂に入り、工房に居住エリアを拡張して個人部屋を作った。

「明日は買い物だ」
「悪くないな」
「女の買い物って長いんだよ」
「黙れ、ヘタレ」
「へいへい」

星空も毒気が薄くなり、蒼天も骨が付いた。何と無くこんな風に過ごすことが楽しみになっている自分が居ることに喜びと、悲しみの両方が渦巻いていた。
部屋に入り、久しぶりに風呂に入り湯船で泣いてしまった、幸い防音は完璧だと気づく。
風呂から上がり着替えて眠った。

翌朝、珍しいことに星空が手料理を振る舞い、低カロリーの品々、それで居て旨味が強い。

「苦労して作ったんだ、ちゃんと食え」
「次から料理人とお呼びしましょうか」
「食事中は静かに」

出された品々を食べ終わり、蒼天が片付けた。

「引き篭もりには珍しい品々だった」
「ヒッキーだったわけ、私なんて歌手兼モデルを副業にしている呪術士よ」
「僕は大学一回生」

よくよく見れば星空は人間で言う美女で流れるストレートの黒髪、黒曜石の瞳、整った顔立ちメガネではないが、メガネに見える情報分析機、何と無く美形に見える。
蒼天は没個性的な顔立ちに服装、逆にそれが異常を感じさせる、最

強の五名に上る一人がこんな風ならはっきりと凶悪と言える。

「ちょっと今日は馴染みを紹介する」
「なんだ？」
「装備類の強化だ」

工房から技術屋の店まで歩き入るとクロードが歓迎してくれた。

「噂はかねがね、最強の三人がパーティーを組んだと」
「現在はとも言うけど」
「装備類の強化だね」
「よろしく頼みます」

装備類を渡し、二人は渋ったが渡し、数時間かけて図面を持ってきてどういう風に改良するのかを詳しく教えてくれた、それから一時間で装備類の強化が終了し支払い、手元に戻ると二人とも大喜び、俺の品々も十二分に強化された。
装備類は電子手帳、創造補助機器、Ｍ５００と防具の強化。
蒼天は首輪型英霊具現化機、召喚補助演算危機、防具の強化
星空は演算機関咒具剣、アコギギター、防具を強化した。
全額は財布が半減するほど、それ以上に図面を覚え改良箇所を手帳に書き込んだ。
それから個室に入れる品々を買い求め、一日が終わった。

翌日早起きして朝食を作り二人を起こしに行き、シャワーなどが終わってから朝食に付いた。

「シンプルだけど私より上手ね」
「よく分からないが美味いぜ」
「なら完食しておけ」
「当然よ」
「しかし一人で食べるより美味いな」
「そうね」
「たしかになぁ」

朝食が食べ終わると片付け、装備を身につけ、完全に狩りモード。
砂漠に向かい、他のプレイヤーは遠巻きで最強トリオだと小声で話している。
砂漠でのチームプレイが完璧に定まり、それを基礎に戦術を生み出していった。
四方の町、十字路の町、クジョウとも呼ばれる、苦行の塔に入った。
湿っぽく攻略スレを見ても湧き率が桁違いだと書かれて、どのパーティーも攻略していない。
一日続く自然回復力激増を飲み、内部に突入して数十歩、早速湧いた二メートルもあるアイアンゴーレムを雷掌で撃破し、それぞれ構える。

「中ボスクラス雑魚扱いか」

次々に湧く中ボスクラスのモンスターを蒼天の召喚でしのぎ、二階へと上がった。
巨大な剣が勝手に歩き回っていた、やはりアクティブモンスターで

中ボスクラス。
ここも蒼天の召喚獣で押し通し、何とか三階にたどり着いた。

「さすがにＴＰがきつい」
「なら演奏するか」
「頼む」

疲弊した蒼天を回復させる為に、星空が歌声と演奏で広範囲の自然回復速度を高めた。
リボルバーになるＭ５００を片手に、５０口径の１２・７ｍｍを湧いてくる巨大なゾンビ系の頭部に連射して、二発で頭部が破裂して倒れていく、パーティーを組んでいるので経験値は平等。
百メートル先まで、ロックオンのようにロックして、精密射撃が出来る。
強力な５０口径で休み休み休憩を交え、そうでないと片腕では痺れてくる。
三十体程倒しても、まだ回復が終わらないらしく、むしろ湧いてくるゾンビ系が増えていく傾向に有る。

面倒なのでＭ８０６、ジェネラル・ダイナミクス製、１２・７ｍｍ×９９の１８キロ、全長１５６７ミリ、毎分２６０の優れもの。
それを使い三脚を拡張して作り、その三脚に置き、毎分２６０発の１２・７ｍｍを撃ち続けた。

「完全回復だぜ」
「私も参加するぞ」
「大口径を連発すると腕が疲れる、二人で突破してくれ」

「あいさ」
「わかったわ」

銃器を消し、しびれる腕を集気法で回復したが、当座は戦闘不加入だと決める。
四階まで蒼天の英霊具現化で雷、弾ける床、大旋風、爆炎で押し通し攻撃を受けても全く減らないチートぶり、星空の身体強化咒術の剣術で切り倒し、無茶苦茶な強さを誇る。
二人が最強と呼ばれたのは強い生存の意志とたゆまぬ努力の結集だ。
四階に上がると風景が一変した、一方通行の扉の連続、恐らく一筆書きだろう。
何度もマッピングして三十分かけて五階に上った。
そこには竜が居た、周りを草木で覆われたドラゴンゾンビ。

「弱き者よ、され」
「そうかい」

蒼天が駆け出し、具現化させ召喚を使いランクの上がった影魔で様々な属性攻撃がドラゴンゾンビを削る、遅れて星空が突っ込みホーリースマイトで斬撃を繰り出し削っていく。
俺は生体レーザーで削っていたが、気づき、接近して閃刀で切り裂き、それが当たりクリティカルヒットになる
ドラゴンゾンビがブレスを吐こうとすると、Ｍ５００で風穴を開け無理やりブレスを阻止する。
蒼天の属性攻撃群、自らの仙術、星空の剣戟、俺の仙技、再生能力を上回る、高ランクの攻撃でドラゴンゾンビは削られ押し切られていく。

ドラゴンブレスが吐けない事に苛立ち、手足、尾を使い攻撃するが逆にダメージを負う返し技で決められていく。
ジリ貧になったドラゴンゾンビはそれでも暴れ続け、二時間かけて倒した。
それぞれに鍵が渡され、最上階に登る鍵を使った。
今度もドラゴンで獰悪な十八メートルはある焔竜だった。

「前衛を頼む、直接支援に入る」
「了解冬樹」
「あいよ」

歩兵用携帯式対戦車ミサイルのジャベリンを生み出し、頭部を狙い発射した、紅蓮の尾を引き、被弾しては焔竜の怒りを買い、ブレスを吐こうとすると、その熱源にジャベリンが当たり爆ぜていく。

本来なら75メートルは開けないといけないが、距離を犠牲に最低距離を十メートルまで下げたのが良作だった。
当たるごとに減らされ、焔のブレスは止めさせられ、二人が左右で攻撃し、圧倒的な個人の力量と連係プレイが完成し、交互に攻撃しては焔竜の矛先をかわした
長い間、チームプレイが基礎になり、▽の陣形になる、この場合己の全力の力器量で戦うが、広範囲に広がるものが使えないのが欠点。
一人が攻撃すれば竜の矛先が向かい二人が攻撃する、ダメージの多い者に矛先を向ける、それを残る一人が攻撃し矛先が向かう、今度は交互に攻撃し、矛先が変わり、二人が攻撃する、それを繰り返しダメージが蓄積していった。
01式対戦車誘導弾を撃ち込み、それがクリティカルヒットになっ

て１８メートルはある焔竜は倒れた。

「やっと倒れた」
「お疲れ」
「お疲れ様」
「ドロップアイテムは」
「僕のところには着てないね」
「私のところにも着てないね」
「となると俺か」

アイテム入れに新しくはいっていたのは、竜の鍵とオリハルコンが六つ、夜の紋章が六つ、ギルドキーが一つ。

「入っているよ」

中身を話すと

「マジかよ」
「ありえねぇ」
「そんなに凄いのか」
「そうだな・・時価は億単位」
「それは凄い」

クギョウの塔は未だに続いている、焔竜が最後と思えばまだ階段が

あり昇った、途中で昼食を食べ、一時休憩し飲み物として持ってきた珈琲で温まった。

「正直きついわ」
「僕は平気だけど精神的に厳しいね」
「弱音を吐いても敵さんは手加減してくれないぞ」

クギョウの塔は十階まで続いた、最後は月の神殿、そこにオルリハルコンを六つ置いた、そしたら作動して鼠の鍵が渡された、一部ヒントも貰いオルリハルコンは返されて、ランクが平均５アップした。体の一部にペイントマークのようなアートマと呼ばれるものが出た。

最初の扉のところに強制送還され、攻略スレに書き込んだ。
賞金首等を倒しては賞金を貰うことを繰り返していた。
実際攻略スレに書き込んでからは狙ってくる雑魚も増え、返り討ちにして装備品を売却した。
賞金首は首吊りの刑で、まだデットにはならず、プレイヤーが下着と上着で首をつられている光景が街中でよく見かけるようになり、岩塩採掘も用心棒を雇うようになり、治安悪化の為にギルド創設の物を騎馬隊に渡し、治安維持騎馬隊のギルドが始めて建設された。

治安維持騎馬隊ギルドが出来てから、治安は急速に良くなっていったのが最良。

クギョウの塔に挑むプレイヤーも増えた四ヶ月目の下旬だった。

久しぶりに素材屋に三人で出向き、いらない素材を売り払い、必要な素材を買い込み四ヶ月目の終わりまで悠々自適に過ごしていた、原因は素材が意外に高値で売れて９００万で売れたからだ。

一級品の宝石類を錬金術で作り出し、素材から一級品が容易く作れ、何度も往復しては一級品を作り続けた。

1l8

1—8

五ヶ月目に入り新たなエリアが開放された、咒術都市から伸びる廃墟の都、科学都市から伸びる砂海の油田地帯、古都から伸びる塩田の都。
攻略するのは面倒だと意見は一致して、クギョウの塔を何度も攻略しては、完璧な攻略スレを作って、連係プレイを生み出していった。

装備も耐久力が減りクロードの所で完全に直してもらった。
百万ほど請求されたけが、装備品の調達よりは激安だ。

干支の灯火はこう映し出されていた。
四方の鍵を集め未知なる扉を開くがいい。
ランクアップは一度だけで、残りはオルリハルコンを集めるために、ひたすら激戦の日々。
ドラゴンゾンビも焔竜も攻撃パターンは同じで、それから深く対竜戦術を生み出した。

半日で終わるようになると、久しぶりに素材屋ロルカの店で、店を構えるほど儲かったらしい、そのおかげで色をつけてもらい要らない物を売り払った。
宝石買取店を開くほどツブラは儲かったらしい、そんな風に馴染みの店は次々と打ち立てられていた。
夜は飲み会だ、宴会とも言う。

日本酒、ワイン、ブランデー、ビール、それら酒類をお互いに飲み交わしながら昔話をしている。
色々と苦労が多かった蒼天、色々とドラブルに巻き込まれる星空、数万年生きた俺の昔話。
二人は酒も入り信じるよりも話の内容に笑ったり、怒ったり、今まで忘れていた感情が戻ってきたかのように俺も同調した。
連係プレイの話になると互いの欠点を補うように創意工夫を凝らした。

そんな毎日が五ヶ月目だったの日常だったのが、クギョウの塔への修練は欠かさなかった。

何十回か忘れたが、クギョウの塔に挑戦している。

今度は白兵戦での挑戦だ。
ドラゴンゾンビを倒し、焔竜を追い詰めた状態、▽の攻撃で削られる一方、矛先が向いても互いに補う戦術からブレスを吐かさず、削る一方。
手足、尾、頭部、ブレス、それを行なわせずゲームだから可能な戦術パターンだ。
今の所焔竜を倒したのは俺達だけで、他のプレイヤーは他の三箇所の攻略に勤しんでいるが、クギョウの塔も人気の有る湧き率が高いところが素材のドロップ率の良さらしい。
考えれば7／30日に発売され8／1からログアウト不能、今頃は新年を祝う頃だ。
全人口は万単位、下手したら数百万人が参加したことになる。

装備の耐久度を戻し、クロードに改良点を聞くと、これ以上改良すると耐久度が減ると、話したので止めた。

「そういえば気づいた、干支だと」
「気づいた」
「知らない侍」
「あまりバカを言うとど突くぞ」
「あいあいまむ」
「それより四個の干支が終わった五ヶ月目だ、新年会でもしようか」
「賛成！」
「いいわね」

昔ながらの新年料理を作り、酒は星空が買いに行き、食器類は蒼天が買いに行った。
馴染みもそれぞれ新年会をやるようで、大晦日は大いに忙しかった。
新年を迎えてお節料理を食べて酒を飲み交わし、最近感情が表れ始めた。
馴染みや仲間から微妙に機嫌がいい日は笑顔そうで、機嫌が悪い日は凶相のような感じだと。
新年会が終わると酒を飲むだらだらした生活に入り、二日目でクギョウの塔に入った。
憂さ晴らしの様にＦＮ２０００を両手に持ち撃ちまくった。
銃声、銃火、銃弾がモンスター達をあっさりと殲滅し、一人で戦いながら五階まで上った。

「気が晴れた？」

「十二分に、これからは連係プレイだ」
「よし」
「あいよ」

ドラゴンゾンビはいつもの戦術で倒して、焔竜も同じように倒した。
最上階に入ると共生的に戻され、雑多とした人ごみに消える。
何度も繰り返してきたために忘れていたレシピスキルを購入し、他の都も周り購入しては覚えたがアクティブは殆どレベルアップのもので、バッシグも同じだった。
レシピレベルは9まで達し、残りは１０だ。

趣向品を買い揃え、部屋にスモーキング・ジョーを十二ダース程置いて、錬金術から爆弾、回復アイテム、強化素材を作り、久しぶりに自由時間で販売した僅か三十分で完売し酒場に入って煙草を吸いながら、サラミをツマミにジンジャーエールを飲んでいた。

そんな愉快な時間に、くだらない連中が絡み、久しぶりの自由時間を邪魔されたので、仙技で打ち倒した、というより立てないようにしてやった。
特にすることもなく、露天市場を見て回り辞典などを買い求めた。

酒場に戻り酒を飲みながら辞典を暗記していた、もちろん役立つ生体化学式。
その他メカニズムが解明された技術など。

ドアがノックされた。

「飲むぞ」
「分かった」

辞書を道具入れに戻し、身だしなみをチェックして出る、はっきりと公言できるが、飲み会できっちりした服装はかなり厳しいと思う。キッチンとラウンジが一体化した、場所で蒼天がすでに出来上がっていた。

「おう来たか」
「お前もノンベイだな」
「まあ飲めよ」

椅子を引き座る、隣に星空が座り、飲み会が始まる。

「酒だがつまみが枝豆だと低カロリーで良いな」
「塩加減が良い、腕を上げたな」
「最近、ＰＫが無いな」
「いや変態化物が居るらしい、噂だがＰＫＫをしているらしい」
「強さを求めるか、今は酒の話だ」

それぞれ酒の薀蓄を話、飲み会は続く。
音楽の話、楽器の話、工学の話、文学の話、軍事の話、技術の話、

多岐に渡る会話とツマミで翌朝まで飲んでいた。

１ｌ９

主人公、冬樹、
冬樹、創造８０、仙技３５、仙術４０、射撃８０、兵器許可８０、
錬金術８０、短縮８０、軽装８０
兵器種類にレーザー系が追加され仙術類の多様性を獲得した。

称号・召喚士、青空、愚者６８、拳士６２、召喚７８、仙術４８、
短縮７８、瞑想７８、思念７８、軽装６２

英霊＝物理無効、咒術無効、自然効果、属性攻撃無効、ユピテルの
怒り、大旋風、ガイアロック、エクスプレーション。

召喚、ランク限界まで五体を召喚

拳士＝輪剄、徹陣、地層返し、鋼鉄斬

仙術＝硬気功、軽気功、集気法、生命波動、御神力

性格は常時は能天気でヘタレ、柄の悪い相手にはさらにヘタレ。
最近骨がついてきた。

称号・咒術剣士、星空、歌５２、演奏５２、剣士６１、咒術７２、
短縮７２、瞑想７２、思念７２、魔装７２

歌手＋楽器＝歌声と演奏で補助的なものから回復までこなす

剣士＝アサルトステップすばやく踏み込んで低姿勢からやや上に突
き上げる二連技、

サンセットラスター上下から剣を振り下ろす技、
ソウルピアシング踏み込んだ後低体勢からの突き、
ダブルウィンド敵に近寄った後左右から切り払う二連撃、
トライクルセイド剣を構えながらジャンプして敵を跳ね上がる三連撃、
ホーリースマイト剣に聖なる力をこめて横から切りつける技、
ミステックファントム一瞬で相手の背後に回り斬撃を衝える、
レゾネイトペインすばやく踏み込み突きを繰り出す四連撃。

呪術＋短縮＋瞑想、テクノマジック、生体系、光学系、化学系を得意とする
今まで猫を被っていたが仲間に打ち解け地丸出しで居る

1ー9（後書き）

ストック切れです、最近書いたやつで考案してみました、粗雑ですみません。
二章めを書くので時間がかかると思われます、ともいいますが時間が必要なので時期を開けます

１－１０詩聖の塔

１－１０詩聖の塔

困った事がおきたのは六ヶ月目だった、苦行の塔のドロップアイテムが暴落した。

その原因は分かり切っている事に苦行の塔の人気ぶりで、素材系が暴落したのだ。

その為に他のところに散らばり、特に詩聖の塔は人気が高かったが、残念な事に四箇所を項の略しなければ意味が無いらしく、多くのプレイヤーが大変な時期に差し掛かっていた。

６ヶ月目に入り新たなエリアが開放されていた、呪術都市から伸びる廃墟の都から攻略した呪術士のギルド円卓、科学都市から伸びる砂海の油田地帯は科学者達のギルド共和国、古都から伸びる塩田の都を攻略したギルドガンメーカー。

騎兵隊も併せれば四個のギルドが建設され、治安維持に当っている。

そんな訳でギルドに関係なく、詩聖の塔の攻略に向かった。

「最初に赤の塔だけど、物理攻撃が効かないじゃない上に属性攻撃よ」

「物理以外の攻撃手段と防具に属性抵抗＋2だったような」

「だった」

「老ボケ」

「なんだってぇ！」

「それより倒さないか」

「覚えておけ」

「おお怖」

四階に上がり、ファイアーゴーレムがボスだった。
蒼天が召喚で影魔を出し、大寒波を連発している、さらに液体窒素の槍を無数に作り出し星空が足止めをしていく、アームスコーの４０？榴弾の中身を液体窒素に変換し、連発して氷結でファイアーゴーレムを倒した。

「軽かったわね」
「弱点がわかれば雑魚だよ」
「昔の豪い人は言ったもはや形骸であると」

ドロップアイテムを見ると赤の欠片が入っていた。
帰還のスクロールで出入り口に戻り、クジュウに戻り、それから青の塔を攻略はあまりに容易かった、数の暴力で圧倒しボスは弱点属性の熱で粉砕した。
緑の塔は樹海に近く、耐久力が異常でアームスコーを連発し、時には雷掌を繰り出し、一番は生体レーザーで焼ききった。
塔の四階で緑のハイエンシェントドリアードが待ち受け、単調な蔓の攻撃や枝の攻撃できたが、離れてから召喚、英霊、呪術、創造の攻撃で丸一日戦い、なんとか勝利したが、回復薬が底をついて自然回復力もあったせいで倒すのに苦労した。

本来はギルドのなどの多数で倒すらしいが、三人で倒して、攻略スレには最強から最凶に変っていた。
黒の塔は地下にあるために、十字路の町で道具を揃えていったが、製作者の性格がわかるほど多彩なトラップに仕掛けられていた。

魔法無効エリア、テレポート、暗闇、一方通行、隠し扉、性格が

激的に悪い。
そんな難関を攻略して地下二階に下りた。
今度はT路地の作り、ここがどこか錯覚してしまう製作者はかなり性格に問題があったのだろう。
単純な構造の三箇所とは訳が違う。
二階から三階に降り立つと今度は一方通行に二箇所に落下する床。
ミスって下りられない方を選んでしまったと思ったら、良く見れば形が違う床が有った。
其処に立ち、何とか落下を防いだ、それから調べ隠し扉を見つけ何とか四階に通じる通路に出た。

「製作者は意外にダンジョンメーカーだったようだ」
「性格悪すぎよ」
「煙草吸っていいか」
「葉巻ならいいわよ」
「ならそうしよう」

道具入れから取り出した葉巻を咥え、先を切り落とし、マッチで炙り、二度目に火をつけた、紫煙を深深と吸い込み吐く、それを繰り返して葉巻を吸い終わると。

「次はボス戦だ、攻略スレには何も書いていなかった」
「予想では闇系ね」
「そのままなんですけど」
「要約すればアンデット系だ」
「物理無効かぁ」
「昔とは違うのだからチームプレイよ」

「そうだよな最近連携も上手くなったし」
「少し休憩だ珈琲とサンドイッチがあるが？」
「頂くわ」
「僕も」

腹が減ってはというように、食べて終ると暖かい珈琲で胃袋を暖めた
食後の休憩を挟み四階に下りた。
アンデット系と戦っているパーティーに援護射撃して気づかせパーティーのリーダーが撤退の指示を出す。
アンデット系には徹底した弾幕で応戦し重機関銃で破壊した。
ボスはアンデットの親玉らしくスケルトンキングと表示され、いつもながらの連携攻撃で圧倒して割と簡単に倒した。
黒の欠片がドロップして帰還のスクロールで帰った。

四つの使い道がわからないが合成してみると鍵になり、詩聖の鍵となった。
苦行の塔に登り最上階で夜の紋章を設置して鍵を差し込むところに差し込んで回した。

ランク制限、レシピスキル制限、二次職が解放された。

１―１０詩聖の塔（後書き）

評価、感想などがあればよろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4837z/

とあるクリエイターの始祖

2011年12月26日12時49分発行